

【論文】

計画の近傍概念 — 計画学のための基礎的考察 その5 —

江上 徹

On the Close Concept of Planning — A Fundamental Study for Planning Theory Part 5 —

Toru EGAMI

Abstract- Criticism of Architectural planning theory increases and the word “design” is used much in place of the word “planning” of late years. One of the background consists in the initial trend to establish the architectural planning theory as technology and a change of the social circumstances has influence on this tendency. In this paper we put a question to the propriety of grasping the architectural planning theory as technology and study on technique and design which are close concepts of planning.

Keywords : *planning , technology , technique , design*

1. はじめに

本研究の「その1」^{*1}で述べたように、この10年余り、建築計画学に関する反省や批判的論議が盛んである。2006年度の日本建築学会大会において、建築計画委員会はこの問題に関連して二つの興味深いシンポジウムを開催した。一つは「プロトタイプからプロトコルへ — 21世紀の建築計画学のあり方を展望する」という研究協議会であり、他の一つは「建築計画、その可能性の中心 — 建築計画は集落を超えることができるか」という研究懇談会である。

前者の問題意識は、企画を担当した野城智也のレポートに端的に示されている。彼は現在の建築の危機を、「建築の質を担保するための仕組みが働かなくなってきた、いいかえれば、個々のプロジェクトで建築の質が確保されるか否かが極めて不安定になってきている」^{*2}点に見ている。そうなった背景の一つは、「建物の規模・予算などの「与件」が確定すれば、あとはほぼ自動的に建物が実現されていく」と発注者に受けとられている状況であるという。そして、「建築計画研究者が、このような状況を生むために知の成果を出してきたわけではないことは勿論である」としながらも、「しかし、法則性の発見を探求し、そこからプロトタイプを抽出して

* 建築学科

いこうという学の姿勢がもたらした成果が、不本意な形でつまみぐいされて「自動的に」建築を実現していく制度を構成し固定化させていることに手を貸しているのではあるまいか、という疑いは常に抱き続ける必要があるように思われる」と指摘しているのである。

ここには、本研究「その1」で主題の一つとした法則(性)概念^{*3}の問題が現れている。つまり、ニュートン力学以来の物質運動の相における法則(性)に準じたハードな法則(性)概念ないしイメージがあり、建築計画研究者の法則性発見の探求とそれに基づく計画指針の提案はプロトタイプの抽出と、計画実施へのその自動的適用という風にとらえられているのである。ただ、状況は変わりつつあるというのがこのシンポジウム開催の問題意識である。研究協議会の開催趣旨には、「こうした学をとりまく周辺状況がかわりつつあるなかで、特定の評価基準を暗黙の前提として、科学的に導かれた知識や法則を「真理」として提示することの有効性が社会のなかで狭まりつつある」と述べられ、その次の状況として、「社会的な「約束/合意」をプロトコル(手順・手続き・手法)を導くことが、その重要性を増しつつある」とされている。それ故にこそ「プロトタイプからプロトコルへ」と題されているのである。

後者の問題意識もそのタイトル、サブタイトルに粗方示されている。ここでは伝統的な集落は概ね時間をかけて自然に生成したもの、つくられたもの、つまり非計画的なものとしてとらえられ、計画はそれを超えることができるのかを問いつつ、建築計画学の可能性を探ろうというのである。シンポジウムの席上、布野修司が「タイトルにある建築計画は正しくは建築計画学とすべきである。旨の発言を行ったが、適切な指摘であると思われる。この10年来問われているのは建築計画ではなく建築計画学なのである。本研究「その1」の第3章「人間の活動の構造と計画」で述べたように、計画は人間の活動の本質的特徴に根ざしたものであり、建築計画という活動ないし概念は建築をつくるプロセスの中に広く存在するものである。可能性が問われているとすれば、この活動それ自体ではなく、それに関する「学」の方であろう。

ところで、シンポジウムの企画者から明確な発言があった訳ではないが、「建築計画、その可能性の中心」というタイトルは、第10回の亀井勝一郎賞を受賞した柄谷行人の若い頃の論文、「マルクスその可能性の中心」^{*4}を意識したものではないかと思われる。柄谷がどのようにその可能性の中心を見ていたかは別にして、普通、マルクスは剰余価値の発見と唯物史観の提示で評価されている。建築計画学で言えば、住み方調査や使われ方調査という方法や、住宅における食寝分離論や小学校における高低分離論等の、生活の中にある矛盾や法則性に着目した空間の秩序化を目指した計画指針や型の提示、或いは施設の規模計画論の提示ということになるだろう。

確かにこれらは評価されて然るべきであろうし、現在でも可能性を持っていると考える。しかし、例えばマルクスに関しては上記のような、成果として後に抽出されたものではなく、まだマルクス主義などというものが存在しなかった頃の、高校卒業試験のための作文「職業選択にさいしての一青年の考察」や20代半ばに書かれた「ヘーゲル法哲学批判序説」等を示された倫理意識、或いは矛盾に満ちた現実を何とかしようという燃えるような正義感にその可能性の中心を見ることも可能であろう。建築計画学についても同様である。初期の建築計画学の問題意識には、単に技術的な側面だけではなく、限られた条件下で何とか生活をよりよくしようという倫理的と言ってよい側面が存在した^{*5}。西山外三の食寝分離論も、単に住宅の設計を合理的、科学的に行うということだけではなく、戦時下での軍需優先による居住水準の切り下げへの抵抗という意味を持っていた。上記の「プロトタイプからプロトコルへ」というシンポジウムの開催趣旨にも、「焼け野原のなかで建

築計画学は産声をあげた。あらゆる資源が乏しい状況のなかで、優れたプロトタイプを創造し、それを範として建築を作っていくことが、より良き建築と都市を構築していくためには最も優れた手段であった」と述べられている。温暖化やそれと裏腹な化石燃料枯渇の問題等に示されるように、現代も資源には大きな限界性がある訳で、こうした初期の建築計画学の問題意識や方法には依然として可能性があるだろう。

ただ、このような乏しい資源、限られた条件の下での合理性の追求や、建築学の体系の中に新しい分野たる計画学の存在を認めさせ、根づかせようという努力の過程で、この学を技術学としてとらえ、定立しようとする指向性が生まれた^{*6}。この計画を技術に重ねてとらえる、計画学を技術学として定立しようとする指向性が、「プロトタイプからプロトコルへ」の中で述べられた自動性や固定化という結果に結びついているのではないだろうか。そうだとすれば、この辺りでもう一度原点に戻り、計画学を技術学としてとらえることの正当性ないし問題性について考えることが必要であろう。

一方、「建築計画、その可能性の中心」の主題解説に当たる「はじめに」で、本多常友が「……企画、設計段階における構築作業はその入り口の多さにもかかわらず、そこでたどる道筋において、価値の序列化やデザイン手法において多様化という言葉からは遠く、むしろ不定型化しつつあるとでも言うべき迷いを生じてきているのではないかと感じられる^{*7}」と書いたり、巻頭の報告「建築計画に関するノート」の中で平田隆行が、「建築計画学はもう一度、状況を把握し、生活を捉え、課題と問題を発見し、そこからカタチを導くためのデザインの学問として位置づけられ直さねばならないように思う」と書いていることにも示されるように、近年、「計画」という言葉に代わって「設計」や「デザイン」という言葉が多用される傾向が見られる。本研究「その1」では、「1930年代で、計画の観念ほど流行した観念はほとんどなかった」という、阪上孝の「計画の観念とテクノクラートの形成」の中の言葉を紹介したが、今日この言い方に倣えば、「20世紀末から21世紀初頭にかけて、設計やデザインの観念ほど流行した観念はほとんどない」ということになる。日本建築学会建築計画委員会委員長であった服部岑生編著による「建築デザイン計画——新しい建築計画のために」というタイトルの本が出版されたり^{*8}、理工系の学部で「デザイン」という言葉を取り入れた新学科が次々に生まれ、年金制度等に典型的に見られるように、〇〇の制度設計という言い方は最早一般的であり、果ては核弾頭の開発や管理にさえ

ザインという言葉が使われたりするるのである。

建築の分野で設計やデザインという言葉が多用されるのは当然とも言えるが、やはりそこには状況の変化があると見るべきであろう。上述の「建築計画に関するノート」の中で平田が、「今、建築家には従来型ではない建築のカタチをつくることが求められている」、「コンペ案に見られるように、その場一回限りで生み出された新しいカタチを生み出すための根拠は、たとえそれが単純で稚拙なものであっても、新しいカタチを求めるとい時代要請がある。等々と書いているように、一回性や個性、新しさへの指向性が強まっているのではないかと考える。だからこそ、プロトタイプをつくることに向かうととらえられた建築計画学への批判がなされて来たのであろう。こうした変化を踏まえれば、先述の技術と同様、設計やデザインと計画の区別と連関の問題についても考えておく必要があるだろう。

このような問題意識から本稿では、技術、設計、デザインという計画の近傍概念についての考察を試みたい。

2. 再び人間の活動の構造について

本研究「その1」では図-1のような生活構造を示し、この生活全般にわたる共同という生活様式と直立二足歩行という行動様式から象徴化・抽象化能力や記憶力、そして高度な自己意識が生まれ、言葉や道具がつくり出され、結果的に人間の活動は図-2に示されるような三層の構造を持つことを説明した。又、存在については図-3に示すように、物質、生命・生物、人間という三層に分けてとらえられることを指摘した。ここでは、技術や設計、デザインと計画の関係を人間の生活との結びつきの中で考えるために、再びその活動の構造に目を向けたい。

図-1や図-2に至る考察の出発点は、人間の生活の基本はその生命の維持・発展にあるということであった。そのために、人間は自然や他者や社会等に対して様々な活動を行うのである。この活動を図-3の存在の三層と関連させれば、人間の活動は身体の空間的運動である物理的活動、身体を構成する

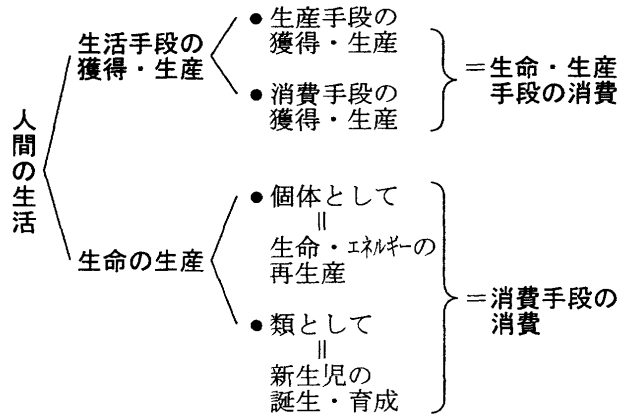


図-1 人間の生活構造-1

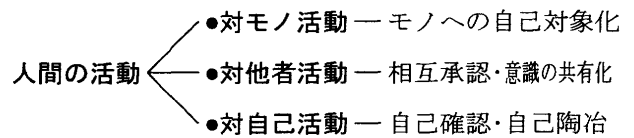


図-2 人間の活動の構造-1

細胞レベルの運動である生理的活動、それらを基礎としつつ、一方ではそれらをリード、コントロールもする運動である心理的活動という三つのレベルないし領域に分けてとらえることができよう。むしろ、この三つの活動は各々独立して存在するのではなく、実体としてはひとまとまりの活動の三つの側面という形で、抽象的な認識として分類されるのである(図-4)。

既に「その1」で、人間の活動については実践と理論という二分法があることを指摘したが、このとらえ方を上述の分類と関連させるなら、心理的活動のリード、コントロールを受けつつ生理的活動を媒介として成立する物理的活動が実践であり、逆に物理的活動に支えられつつ、生理的活動を媒介として成立する心理的活動が意識、そしてその特殊な形式が理論である、ということになるだろう。従来、上記の

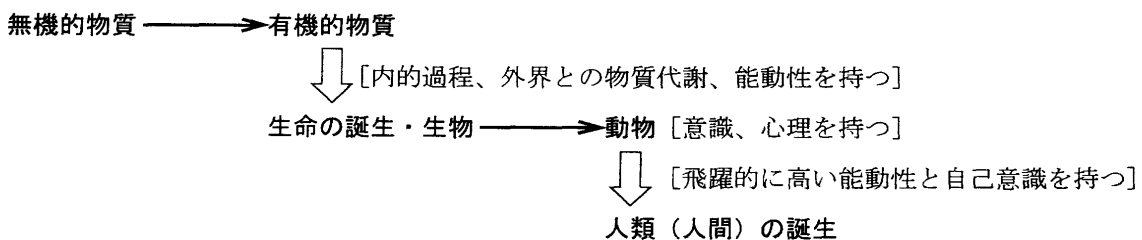


図-3 存在の階層性

ように実践に対しては理論を対置させたり、やゝ範囲を広げて認識を対置させるのが通例であるが、むしろより広く意識を対置させるべきではないだろうか。人間が生命を維持させるためには心理的活動、意識だけでは全く不十分であり、必ず飲食や排泄、睡眠や呼吸といった生理的活動を媒介とした物理的活動が必要である。その意味ではよく言われるように、実践にこそ基底性がある。

さて、物質運動には作用反作用の法則があるが、人間の活動にこれを当てはめれば、実践がこの反作用に相当するものである。ただ、生理的活動、心理的活動という内的過程を持つ人間にあってはこのプロセスはもう少し複雑である。それは図-6に示すように、作用、刺激を受容し、それへの反応を介して実践という反作用を行うという形になる。この受容から反応というプロセスが上述の意識である。更にこの意識のプロセスは図-7に示すように、知覚、表象、概念を主とする認識過程と、情動、情念、情操を主とする感情過程とに分かれる。

3. 計画と技術、設計、デザイン

既に述べたように、生産、消費両面での共同という生活様式や直立二足歩行という行動様式は、人間に象徴化・抽象化能力、高度な記憶力や自己意識をもたらし、言葉や道具がつくり出された。このような人間の活動には他の動物には見られない特徴がある。それは高度な意識性であり、特に活動の結果を前もってイメージする目的意識性や活動へのエネルギーを高めるための感情の鼓舞、喚起等である。人間の生命の維持・発展のためには諸々の活動が必要であるが、それは究極的には先述のように実践として結実しなければならない。

このような実践活動は一方ではその対象に関する認識のレベルによって、他方ではその活動に対する主体の態度、活動への意志、意欲等によって、その実現の可能性が左右される。図-7はそのことを示すものでもあるが、対象についての認識は単なるその形態的、表面的認識から、その内側に迫る構造的認識、法則的認識へと進むに従って、実践の合理性と可能性とを増大させていく。このような認識活動が純化され、高度化されたものが科学である。それ故、科学の発展は人間の実践活動の可能性を拡げていくのである。むろん、これはプラス面だけを持つ訳ではないが、本研究「その1」で述べたように、一般に科学は法則(性)を認識し、それに基づいて対象に関する知識の体系化を目指すものとしてイメージされている。

技術学とは技術を対象とした、技術に関する科学ということができる。技術に関しては周知のように、

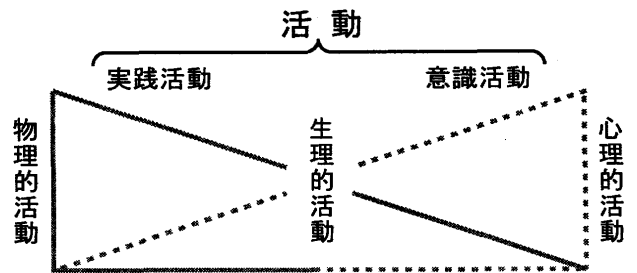


図-4 人間の活動の構造-2

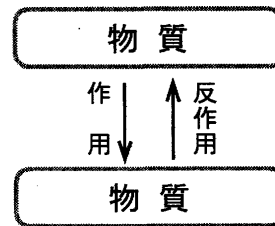


図-5 物質運動における作用反作用

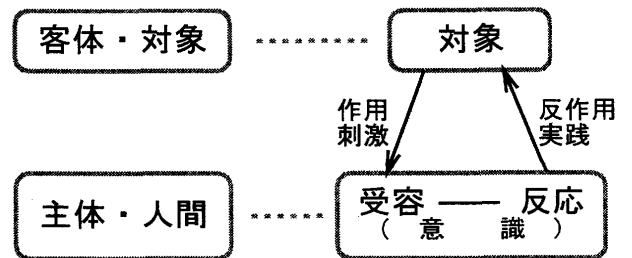


図-6 人間の活動における作用反作用の発展形

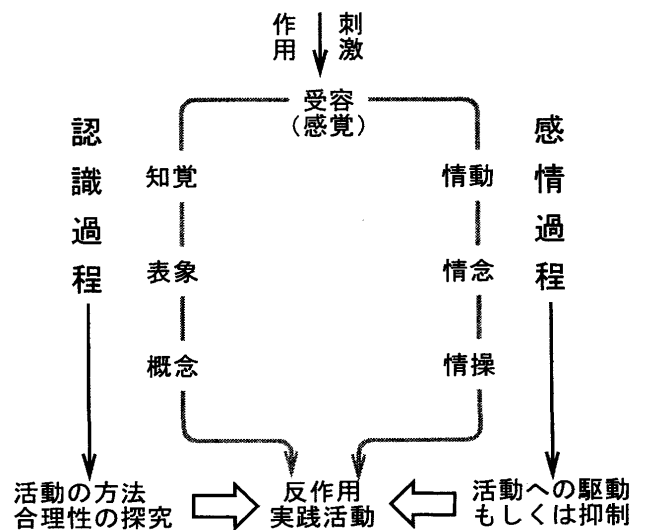


図-7 認識過程と感情過程

その客観性に重きを置いた、技術とは労働手段の体系ないし体制であるとする学説と、技術に関わる人間の主体性に重きを置いた、技術とは人間実践（生産的実践）における客観的法則性の意識的適用であるとする学説とがある。或いは、後者は技術の本質的規定であり、前者は技術の現象的もしくは実体的規定であるとする考え方もある。いずれにせよここで重要なことは、労働手段体系説に端的に示されているように、技術は手段であるという点である。三木清のように技術を単に手段としてだけとらえるのではなく、技術と目的との内的結びつきを論じた人もいるが、少数であり、それに対する批判もなされている。^{*9}

技術にあつては目的は所与のものであるかせいぜい副次的な意味しか持っていないが、計画にあつてはそうではない。後者では目的設定それ自体が計画という活動、概念の主要な内容の一つである。むしろ、予測技術等を含めて目的設定プロセスの中にも技術的側面はある。しかし、それはどこまでいっても技術だけに収斂することはない。計画のもう一つの主要な内容はこの目的を実現するための手段の整備だが、これはまさに技術の問題であり、この側面は技術学として定立可能であろう。ただ、計画という活動の主要な内容の一つが目的設定であるということから、上述のようにそれはトータルとして手段、技術の範疇に収まり切れない。目的設定をめぐるのは価値或いは価値意識というやっかいな問題があり、又、その主体、即ち計画の主体の問題が横たわっている。計画学を技術学ととらえていては、こうした問題群は余り視野に入らないだろう。「プロトタイプからプロトコルへ」の趣旨の中の、「更地に施設を新設する場合であれば、意志決定にかかわる利害関係者は限られていたが、既存市街地における建築行為や、既存建築にかかわる建築行為においては、個々別々の価値基準をもったさまざまな当事者が関与する場合が増えつつある」として、「特定の価値基準を暗黙の前提とし、従来の方法の有効性が狭まりつつあるという指摘は、上述の計画における目的設定やその主体の問題に深く関連している。この問題についての考察は稿を改めて行うこととし、ここではとりあえず、計画学を技術学としてとらえる見方には限界があり、計画学は技術学とは性格を異にする学であると述べるにとどめたい。

ここで再度図-7に戻って、実践活動の実現の可能性を左右するもう一つの側面について考えてみよう。それはその活動に対する主体の態度、意志、意欲ということであった。これは端的に言えばその活動を行おうとする感情、或いはその持続されたものとしての意志である。「わかっちゃいるけどやめら

れない」という歌詞にあるように、対象についての概念的・論理的認識がいくら進展、深化しても、これが欠ければ実践は成立しない。実践活動やその対象への主体の態度、感情は、主体たる人間にとって、その対象及びそれに対する当該の実践がどのような意味を持っているのかという点に深く関わっている。このような主体と対象との関係を、或いは主体にとっての対象やその実践的活動の意味を主体の側から明らかにしつつ、実践的活動への感情を高めるという必要性から生まれ、純化したものが芸術である。クリストファー・コードウェルが「芸術は行動に対する感情上の指針である」とし、芸術を「現実に対する感情的対応の技術である」と規定したのはこうした意味においてであったろう。^{*10}デザインという概念も本質的にはこのような感情喚起と関連していると考える。

さて、先述のように計画には目的設定的側面と手段整備的側面がある。とすれば、住居や建築の計画とは、目標とする生活像を定め、それを可能にする空間はどのようなものであるかを求め、それを実現するための諸手段を整え、行動のプログラムを組むという幅広い概念としてとらえることができるだろう。目標とする生活像、空間像、諸手段は図や模型等として視覚化されることもあろうし、文章や数値データとして表現されることもあり、一般的にはその両方を含む。そしてこの計画内容の図化、あるいは図による計画作業の展開が設計としてとらえられる。設計という言葉は意匠と並んでしばしばdesignの訳語とされるが、この設計という言葉でなら計画とデザインの区別と連関は以上のようなものとして理解され、それはかなりの部分で重なっていると言えよう。

しかし、デザインという言葉は通常そうした設計一般とは違った意味、イメージで使用されることが多い。「あの車のデザインはいいね」とか「感じの良いデザインのセーターですね」といった具合にである。この車の場合のデザインという言葉は、その燃費の良さだとか、居住性の良さ等を対象としたものではない。^{*11}セーターの場合も、丈夫で長持ちしそうだとか、大量生産に適した形になっているといったことを対象にしたものではない。こうした使われ方をするデザインという言葉は設計一般よりもずっと狭い意味しか持たない。そこでは視覚を中心として感情と形態、色彩、テクスチャ等との関係が重視されている。この狭義のデザインは感情喚起ということを主軸に空間や物の形態を定めてゆくものであり、計画とはかなり明確に区分されるべきであろう。そして、この狭義のデザインにこそ他の概念にとって代わることのできない、デザイン概念の核が

あるのではないだろうか。広義のデザイン概念から計画や設計、技術といった他の言葉でも表現できるような内容を取り除いてゆくと、最後に残るのはこの狭義のデザインではないかと思われる。

他方、先に述べたように、人間の感情に働きかける造形活動としては芸術があるが、そこでは純粋に感情喚起こそが問題であり、物理的活動や生理的活動への寄与は問題とされていない。タブローは団扇代わりに風を送るのに使ったり、燃料にもなるだろうが、絵画の本質はそんな所にはないのである。しかし狭義のデザインはそうではない。この造形活動は、基本的には物理的活動や生理的活動に役立つものの形態を対象に、感情喚起という観点から考えようとするものである。この造形物にとって、物理的活動や生理的活動に役立つということは、先の絵画の場合の団扇代わりや燃料代わりとは違って本質的なことである。狭義のデザインは、このように本質的に実用性を持つものの形態を、単に物理的に使えればいいというレベルではなく、眺めて美しい、触って気持ちがいいという具合に、感情との関係をも十分考慮して決定していくというものである。

以上、簡単ではあるが計画と設計、デザインの関係、区別と連関について考えてきたが、非常に大まかにとらえれば、計画と比較して設計やデザインは図や形態の持つ比重が大きく、又、概念、論理に比べ、感性、感情の比重が相対的に大きいと言えよう。この性格、中身の違いが、近年計画に代わって設計やデザイン、特に後者が多用されるという変化に結びついているように思われる。ビデオ、DVD、ゲームも含めてテレビが家庭に定着し、生まれた時から、つまり言葉などわからない時から映像——視覚的形態——にある程度の集中力をもって接するような生活が広がっている。元々、人間の生活にとって視覚が持つ意味は大きかったと思われるが、現代は益々この傾向が強まっているのではないだろうか。竹内一郎の「人は見た目が9割」という新書が100万部を越すベストセラーとなっているが、時代を象徴していると言ってよいだろう。

それに加えて、「はじめに」で紹介した平田隆行の発言にあるように、新しさや一回性、個性が強く求められるようになってきている。この背景には、市場化が進み、共同体的関係が崩れてゆき、いわゆる承認が困難となり、自己確認の機会が強く求められているという状況があると考える。この点に関しても可能ならば稿を改めて検討してみたい。とりあえずここでは上記のような計画と設計、デザインの区別と連関、そして計画に代わって設計やデザインという言葉が多用されるようになった背景への示唆を述べるにとどめたい。

- * 1 「人間の生活構造と法則(性)概念の再検討——計画学のための基礎的考察 その1——」九州産業大学工学部研究報告 第40号 2003年
- * 2 「プロトタイプからプロトコルへ——21世紀の建築計画学のある方を展望する」日本建築学会建築計画委員会 2006年
- * 3 法則(性)という書き方については、上記注1にあげた本研究「その1」の注4を参照されたい。
- * 4 「マルクスその可能性の中心」柄谷行人著、講談社、1999年
- * 5 内藤廣は「建築家の本 まちへ——都市・景観を考える」(JIA編、日刊建設通信新聞社、2006年)の中で、自らの経験を踏まえつつ、「これまで建築家の目は、周囲のまちなみや景観よりは建築系雑誌の誌面に向いてきたのではないかと反省している。こうした倫理意識がまちなみや景観をよくしていく上で果たす役割は大きいと考える。
- * 6 昨夏惜しくも故人となった青木正夫は「建築計画学8 学校1」(丸善、1976年)の中で、「建物とかかわりある生活の法則性を探る研究は、技術学として定立が可能な研究といえよう」と自らの研究を位置付けている。又、昨年の日本建築学会大賞受賞の所感では、「大学院進学後は、理論の確立に努めるとともに、早く他分野からもその存在を認めてもらうため研究を積み重ねた。平坦な道程であったように見られているが、実情はまったく異なる」と建築計画学の草創期を顧みている(「建築雑誌」2007年8月号)。青木の教え子である竹下輝和は、1981年度日本建築学会大会時の建築計画部門研究協議会「使われ方研究における方法論上の問題」討議資料に、「初期の使われ方研究方法論は優れて技術学方法論である」という報告を寄せている。同じく青木の教え子である河野泰治福岡大学教授の最終講義「英国の小学校建築を見つめて」が、2008年1月26日に行われたが、そこではイギリスの小学校建築の画期となったシステムビルドも、第二次大戦時のナチスの爆撃による破壊と資材不足の中で誕生したことが説明された。日本の建築計画学誕生とよく似ているのである。
- * 7 「建築計画、その可能性の中心——建築計画は集落を超えることができるか——」日本建築学会建築計画委員会 2006年
- * 8 「建築デザイン計画——新しい建築計画のために——」服部岑生他、朝倉書店 2002年
その「序」で服部は、この著書の特色の一つとして「建築設計、すなわちデザインへの社会的な関心が向上したことを受けて、デザインの意味や方法の解説を加え、建築作品に関する動向と事例の網羅的な紹介を行ったこと」をあげている。
- * 9 「知識哲学・技術哲学」三木清著、潮出版社、1972年
「技術論」田辺振太郎著、青木書店、1960年
「技術論論争史 上」中村静治著、青木書店、1975年を参照。中村は三木清の技術の本質を発明に見る考え方を批判している。
- * 10 「現代の美学1 現代芸術への視点」菅井幸雄他、啓隆閣、1970年
- * 11 2006年6月2日のNHK朝のニュースにおいて、車メーカーマツダの社長井巻久一は、「車の開発担当者、特にデザイン担当者には「乗って良さがわかる」ではダメなんだ。「見ただけで乗ってみたい」と思わせないとダメ、と常に言い聞かせている。旨のことを語った。ここには、現代における狭義のデザインの意味がよく表れている。